

都小 研小 会報

・発行所
 ・東京都小学校社会科研究会
 ・東京都板橋区上板橋1-3-1
 ・発行人 和田幹夫
 ・編集人 小澤伸生

東京大会を終えて

東京都小学校社会科研究会会長
板橋区立上板橋第四小学校校長

和田幹夫



昨年(令和五年)の十一月九日(木)・十日(金)、第一日：浅草公会堂、第二日：都内四校を会場として、第六十一回全国小学校社会科研究協議会研究大会東京大会が開催されました。全国各地からのべ一六〇〇人を超える方々のご参加をいただき、第一日の大会主題提案から第二日の課題提案まで、すべてのプログラムを対面で実施し、盛会の内に終了することができました。これまで研究の灯をつないでくださった全国の皆様、そして東京大会を支えてくださったすべての皆様にご心より感謝申し上げます。

まず、第一は、大会主題「社会とつながり未来を創る子供の育成」社会的現象の見方・考え方を働かせ、主体的に追究する学習を通して」としっかりと向き合い、これからの社会科学習のあり方に対する都小社研の考え方を力強く提案することができたことです。今回は、大会主題の下、四つの会場校がそれぞれ学校や地域の特徴を生かしながら実践研究を積み重ねてきました。それにより、視点や内容がより一層明確になり、都小社研と会場校が協働して研究を深めていくことができました。

そして、大会主題提案、会場校提案、公開授業、課題提案等を通して、大会主題に迫る私たちのめざす学習のあり方を「教材開発や分析などの単元構想」と

「授業づくりの手だての工夫」の二つの側面から、具体的に提案をすることができました。

また、「授業づくりガイドブック(第二次)」「都小社研年間指導計画(第五次)」もあわせて配布し、私たちの提案を分かりやすく全国の各学校、各教室に広げるよう働きかけることができました。

第二は「オール東京」体制確立の基盤をつくることができました。今回は多摩地区にも会場校を設けました。また、大会に向けた各会場校の研究会には、都内各地区の先生方にも積極的に参加していただきました。さらに、多くの地区の社会科学習部の皆さんが大会主題や研究内容を共有していただき、東京都全体で社会科学習を大きく前進させることができました。これも大きな成果です。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりまして温かいご支援ご指導を賜りました文部科学省、東京都教育委員会、各区市教育委員会、講師の先生方、各会場校の教職員・PTAの皆様、提案・司会・記録等で協力いただいた皆様、研究推進にご尽力いただいた都小社研研究推進委員・各地区社会科部の皆様、並びに大会運営にご協力いただいた関係の皆様のご苦勞、ご尽力に対して心から敬意と感謝の意を申し上げます。

東京大会報告

東京都大会実行委員長
小金井市立小金井第三小学校校長

増田亮

全国や都内から千六百四十六名の皆様においでいただき、東京大会を滞りなく開催することができました。当日参加していただいた先生方はもちろん、これまでご指導くださった講師やOBの先生方、運営や研究を支えた先生方など、本大会にかかわった全ての皆様にお礼と感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

開催方法を五月の都小社研定期総会の時に決めることになっていました。総会前日にコロナが感染症法上の五類になり、躊躇なく参集型で開催できたことは幸運でした。これまでの三年間、感染症対策にご苦勞を重ねながら社会科学習の灯をともし続けてくださった全国大会開催道府県の皆様の思いを受けての東京大会となりました。

第一日全体会は、台東区の浅草公会堂で行いました。基調提案の後、文部科学省初等中等教育局教科調査官 小倉勝登先生の指導講評では、「東京の提案は、学習指導要領の真の具現化を図るものと期待できる」との講評をいただき、たいへんありがたく拝聴いたしました。

第二日は、新宿区立四谷小学校、小金井市立小金井第一小学校、中央区立日本橋小学校、世田谷区立代沢小学校の四つの学校会場で公開授業を行い、どの会場も大勢の参加者が廊下まであふれていた状況だったことは、万感胸にせまる思いでした。学年初別授業研究会、学年初別課題研究会では、熱い議論を交わしていた先生方の姿がありました。

私たちの提案内容のひとつが、問題解決的な学習過程「つなぐ」でした。社会に見られる課題へ子供たちをつなぐことはもちろん、全国からお越しいただいた皆様と東京をつなぐ、さらには社会科学習のこれまでとこれからをつなぐことができた大会ができたことと自負しています。そして、未来を創る子供たちへどのような社会科学習が求められているのかを公開授業で、子供たちの姿でお伝えできたことが一番の研究成果でした。本大会が、社会科学習の振興につながることを心より願っています。

特集

全小社研・東京大会から
研究主題 社会とつながり未来を
創る子供の育成

第一会場

新宿区立四谷小学校
研究主任 杉本 季穂

1 会場校提案

(一) 研究の三つの柱

- ① 未来の社会を創ることにつながる社会的事象の見方・考え方を養う事例や人物の教材化
- ② 「自分発一みんな經由一自分行き」の授業構成による問いを主体的に追究する学習の実現
- ③ 子供が自らの学びを振り返るためのツールとしての「学び方カード」の活用

①では、子供が働かせる見方・考え方と子供が獲得できる知識を分析し、子供が共感できる人物の「工夫や努力」「思いや願い」を教材化した。未来の社会を考えるために、人物への共感を通して「思いや願い」「持続可能性」といった見方・考え方を働かせるようにしようと考えた。

②では、一単位時間の授業構成を「じぶんタイム↓みんなタイム↓ふりかえりタイム」で構成した。「じぶんタイム」で本時の問いについて個別に調べ、「みんなタイム」でペアやグループ学習、各種ツールなどを活用して調べたことを共有し、発問や問い返しによって思考を深め、「ふりかえりタイム」で自分の考えや結論をまとめ、自分たちの学びを価値付けた。

③では、ルーブリック的に示された「学び方カード」を作成・活用して、自分の学習の進め方を学習段階ごとに振り返ることで、問題解決的な学び方のポイントを自覚できるようにした。

第二会場
小金井市立小金井第一小学校
研究主任 笠原 駿

(二) 研究の取組内容

- ① では、子供が働かせる見方・考え方と子供が獲得できる知識を分析し、子供が共感できる人物の「工夫や努力」「思いや願い」を教材化した。未来の社会を考えるために、人物への共感を通して「思いや願い」「持続可能性」といった見方・考え方を働かせるようにしようと考えた。

②では、一単位時間の授業構成を「じぶんタイム↓みんなタイム↓ふりかえりタイム」で構成した。「じぶんタイム」で本時の問いについて個別に調べ、「みんなタイム」でペアやグループ学習、各種ツールなどを活用して調べたことを共有し、発問や問い返しによって思考を深め、「ふりかえりタイム」で自分の考えや結論をまとめ、自分たちの学びを価値付けた。

③では、ルーブリック的に示された「学び方カード」を作成・活用して、自分の学習の進め方を学習段階ごとに振り返ることで、問題解決的な学び方のポイントを自覚できるようにした。

第二会場
大妻女子大学教授
澤井 陽介 先生

(二) 見直し

本日の授業では、事実だけではなく特色、意味、意思、価値を問う問いがほとんどであった。子供たちが見直しをもてる問いを設定すると、「本当にそうか

確かめよう。」となり、学習問題の先に手が届くようになる。

(三) 意思をもって選ぶ

選択するから、共有、最適なものと出合い、視野が広がり、振り返りが自分事になる。本日の授業では、自分の立場や調べ方や、資料の選択があった。

(三) 話し合う場面

ICTを効果的に活用することで、友達の様子が授業の途中で見られた。また、ゲストティーチャーを活用して、子供たちが次々に聞いて対話をし、「自分発一みんな經由一自分行き」の授業が展開されていた。

り上げるために、発達段階や実態を基に何を「委ねる」のか、教師は試行錯誤しながら実践を積み重ねている。しかし、ただ委ねるのではなく、子供の学びを適切に導くことができるように、「教師の出も大切にしている。」

② 主体的に問いを追究する工夫

ア 学びの見直しをもてる学習問題

イ 未来を考える問い

③ 社会的事象の見方・考え方が働く学習活動の工夫

ア 選択学習で子供に学びを委ねる

イ 子供が主体の語り合いの場の設定

ウ 一単位時間の学習展開

④ 子供の学びを確実にする評価の工夫

リフレクシオンの考え方をベースに、各学年の実態に合わせて「ふりかえりの問い」を設定している。また、相互評価の観点から、司会者ではなく、ファシリテーターやフォロワーの育成を行っている。

ア 「ふりかえりの問い」

イ ファシリテーターの育成

(三) 研究の成果

大まかな方向性を校内で共有し、具体については学年に勇気をもって委ねて授業をつくり上げていくことで、教師が自信をもって授業を行うことができ、

子供たちも生き生きと楽しく主体的に学ぶことができた。

2 指導講評

東妻女子大学 先端教育人材育成推進部
教授 櫻井 眞治 先生

これまでの実践から、子供たちが自ら問いに向き合い、未来を考える姿を十分に見取ることができた。どの授業においても、その力を発揮することができていた。特に次の五点について、成果としてあげることができる。

(一) 「考えなければ！関わっていきたい！」という思いの醸成を図る小単元の構成。

(二) 「どうしてそう考えたの？」という、その子供の考えの根拠を掘り起こす教師の問い返し。

(三) 社会科の魅力を教師が共有すること。具体的には、子供と教師がわくわくしたり子供と教師が考え込んだりする授業。

(四) 「子供に委ねる」ための「教師の待ちと出」の想定と実践を繰り返すこと。

(五) 子供の問題追究や話し合いをより良くしていく教師の学び方。

今後も、子供の姿で現行学習指導要領を実現し、さらに、次の時代を見据えて、それ以上の姿も表れるように挑戦を続けてほしい。

第三会場

中央区立日本橋小学校
研究主任 奥田 良英

1 会場校提案

主体的に「問い」を追究する
児童の育成

(一) 研究主題設定の理由

どうすれば、子供たちが主体的に学ぶのか。切実感をもって本気で「問い」の解決を考えるのか。本校における授業改善の課題であった。そこで本校では社会科を中心に実践的な研究に取り組みこととした。

(二) 研究内容

児童の生活に関わりが深い地域教材を積極的に開発すること、そしてその教材との出会いを工夫することで児童が主体的に問いを追究するのではないかと考え、「日本橋スタイル」を授業改善の柱に位置付けることとした。
△日本橋スタイル①▽
地域教材の開発
△日本橋スタイル②▽
教材との出会いの工夫

毎時間2段階の教材提示を行い、児童の驚きや疑問を生み出す。
出会いの工夫①・・・共通の社会的事象に誘う教材

出会いの工夫②・・・インパクトのある実物や矛盾する資料などの教材

△日本橋スタイル③▽

学習内容のまとまりごとの「問題解決的な学習」

毎時間「教材との出会いの工夫△日本橋スタイル②▽」を位置付け、児童が切実な問いをもつよう促す。

(三) 研究の成果

地域の事象を教材化するためには以下の3つの視点が大切だということが明らかになった。
△地域教材開発の視点▽

①児童の実生活上の経験に結び付く身近なもの

②見学や調査を通して自分とのつながりを実感できるもの

③学習後も見詰め考え続けることが出来るもの

また、日本橋スタイルを位置付けることにより、児童の振り返りや児童アンケート結果からも、児童が主体的に学習に取り組むだけでなく、地域や社会的事象に積極的に関わろうとする姿が見られるようになった。

2 指導講評

國學院大学教授

安野 功先生

「地域教材」と「出会いの工夫」という切り口で、子供自身が「社会的事象の見方・考え方を働かせて問題を発見し、学習問題や学習計画を立てて追究し

ていくことや、自分と社会とのつながりを自覚して社会によりよく関わっていく問題解決的な学習の実現を目指した。本時の子供の姿には研究の成果が現れていた。地域教材のよさは地域の『もの・人・こと』を見る目が養われるだけでなく、地域(社会)で頑張っている「人」に寄り添いながら学ぶことができる点である。子供にとってグローバルな目で足元の地域(ローカル)を見つめ直し、地域へよりよい関わり方を考える機会となり、社会科を実生活に結び付けるローカルな学びにもつながる。今後引き続き研究を継続していくことで、社会とつながり未来を創る子供の育成を目指してほしい。

第四会場

世田谷区立代沢小学校
研究主任 横田 富信

1 会場校提案

(一) 研究内容

本校は「代沢スタディ・スタイル」を開発し、研究に取り組んだ。「子どもが自ら学習内容や方法を選択」して学ぶことを重点にする中で、次の三点の重要性を見いだした。
①学習計画を「問い」の形で設定することで、社会的事象の見方・考え方が働きやすくなる。

②「一枚ポートフォリオ」を活用することで、学習を自ら調整しようとする態度が育つ。
③教師による個別のかかわりで、学習スキルも定着もする。
(三) 当日の授業から
三年生「世田谷区のうつりかわり」の「つかむ」段階では、区内三か所の写真をもとに、生活や町の様子の変化に着目して学習問題をつくることができた。
四年生「自然災害からくらしを守る」の「しらべる」段階では、各自が学習内容・方法を選択し、学習状況の進捗を管理・調整ながら調べられた。「つなぐ」段階では、「現在・未来」「自分で・地域と」という二次元表を活用したことで、共に着目して社会との関わりを考えられた。
五年生「情報をいかす産業」の「つかむ」段階では、学習計画と「学習の目標」を設定し、学びの見通しをもたせることができた。「つなぐ」段階では、「生成」を取り上げ、これからの産業の発展と国民としての関わり方を考えることができた。
六年生「新しい日本、平和な日本へ」では、「つなぐ」段階で「歴史を学ぶ意味」を取り上げた。政治学習も踏まえ、タブレット端末に蓄積してきた学習履歴

る。

をもとに、歴史的人物の働きに着目して、これからの日本の発展で大切にすべきことを考えることができた。

2 指導講評

白百合女子大学教授

中田 正弘 先生

代沢小の先生と『学び』は、『参加』から始まる」ということを大切に子供が意志・判断を生かして「主体的に学ぶ」ことができる授業を構築してきた。今日の授業で、子供たちは「何のために何を学ぶのか」を理解して学習に臨み、主体的、自律的に学習に参加していた。「つなぐ」段階の授業では、学習してきたことを踏まえ、自分の生活とのつながりを大切に、社会への関わり方を発言したり話し合ったりするなど、質の高い授業が展開されていた。

子供が、学びの質的な保証を実感し、学び方を自己調整しながら学習するためには、教師と子供が学習のゴールを共有すること

・深い学びにつながる「問い」を作ること

・他者と対話する学習方略を獲得させること

・形成的な評価をもとに子供へフィードバックを行うことが大切である。

各地区の取り組み

中野区 研究主題

「社会とつながり
未来を創る子供の育成」
～社会的事象の見方・考え方を働かせ、主体的に追究する学習を通して～

中野区では、二年前より研究主題を本年度行われた東京大会のものとして研究に取り組んできた。各学年部会が、社会とつながる姿と未来を創る姿を具体的な姿で設定、実現するための工夫を提案し、その成果と課題について全体会で協議を重ねた。

①四年「こみの行方」

まよめの段階で、改めて自分の生活を5Rの視点で見直す活動を行い、子供たちが「自分たちの生活は、どう改善できるか。」具体的な取り組みを考えることができた。

②六年「江戸幕府と政治の安定」

歴史単元において、「政治」や「外国とのかかわり」といった視点をもち学習し続け、その視点に沿って、他の時代よりも長く続いた江戸時代についての問いをもつようにした。

③三年「消防の仕事と人々の協力」

まよめの段階で、再び区内の火災発生件数を提示し、火災はなくなっていないことに気づき

「自分でできることや大切なこととは何か」 自助や共助について考えることができた。

④五年「自然災害から暮らしを守る」

子供が4月より発生した自然災害の記事を資料化したものを主資料として、その発生理由や公助の取り組みについて学習問題を設定した。

中野区立白根小学校
主幹教諭 木本 武志

杉並区 研究主題

「社会とつながり
未来を創る子供の育成」
～社会的事象の見方・考え方を働かせ、主体的に追究する学習を通して～

令和三年度より全国大会を見据え、研究主題を都小社研の研究主題にそろえ「社会とつながり未来を創る子供の育成」社会的事象の見方・考え方を働かせ、主体的に問いを追究する学習を通して」とした。杉並区社研では、四つの学年部会で検討を重ね、三年「杉並区のうちりかわり」、四年「住みよいくらしをつくる」水はどこから」、五年「これからの食料生産とわたしたち」、六年「明治の国づくりを進めた人々」の四本の授業を一

斉研究日に公開した。

「つかむ」段階において、子どもの問題意識に基づいた学習問題をつくり、「調べる段階」への見通しをもたせること、「調べ」段階において、一人一人が興味・関心や学び方の特性を生かしながら調べられるようにすること、「まとめる」段階において、調べたことを基に協働的に中心概念へと迫っていくこと、学習内容や学び方についての成果や課題を実感させる振り返りをするこことによって、児童一人ひとりが主役となり、意欲的に社会科の学習を進められるようになることが見えてきた。

杉並区立杉並第三小学校
主幹教諭 戸田 憲一

府中市 研究主題

「社会とつながり
未来を創る子供の育成」
～社会的事象の見方・考え方を働かせ、主体的に追究する学習を通して～

府中市では、地域の特性を生かした教材を開発し、問題解決的な学習をより充実させるために学習問題作りや資料提示などを工夫し、授業実践を行った。

【実践一】三年 「わたしたちのくらしと販売」

では、買い物物調べカードを活用してなぜスー

パーマーケットを利用している家庭が多いのかという問いをもたせ、学習問題につなげさせた。

【実践二】四年 「水害からくらしを守る」

では、「今のくらしを守るためにできること」について、児童一人一人が自分はどうかな取り組みをすることができると考える学習を行った。

【実践三】六年 「明治の新しい国づくり」

では、江戸時代と明治時代のまちの様子を比較することを通して、新しい国づくりがどのように進められたのかについて学習問題を立て、資料から予想させた。

【実践四】五年 「情報をつくり、伝える」

では、テレビを学習してから発展としてラジオを学習させることで、テレビでの学習を生かし、比較しながら学習に取り組むことができること考え、コミュニケーションを教材で取り扱い、情報の送り手としての立場を自分事として考えられるようにさせた。

府中市立府中第九小学校
主幹教諭 安岡 雄大

西東京市 研究主題

「社会とつながり
未来を創る子供の育成」
～社会的事象の見方・考え方を働かせ、主体的に問いを追究する学習を通して～

今年度の全国小学校社会科研究協議会研究大会、東京大会に向けた東京都小学校社会科研究会の研究と、本市社会科研究部の研究を関連させ、研究の視点をより明確にし、より構造的な授業づくりに取り組むことができるかと考え、研究主題を設定し、三つの授業実践を行った。

① 三年「農家の仕事」

栄養士の話や献立表から、地域の生産の仕事への問題意識を高め、農家の分布図を用いて位置や空間的な広がりから社会的現象を調べるようにした。

② 六年

「戦国の世から天下統一へ」戦国時代の勢力図の変遷の資料により児童に問いをもたせ、ダイヤモンドチャートを用いて、調べる視点を明確にした。

③ 四年「届けよう命の水」

玉川上水の今昔の様子から児童が多様な問いをもてるようにし、環境保全活動の方のインタビューを生かして、玉川上水を自分事として考えられるようにした。

今年度の実践から、次年度は更なる研鑽を重ねていきたい。

西東京市立上向台小学校
主幹教諭 飯岡 利彦